

述べてゐる。次に一々の文化の闡明に就ては例へばテキサス及び南東アリゾナのそれは Harold S. Gordin 氏、ニュー・メキシコ方面の Folsom 文化に就ては T. H. H. Robert 氏、その絶滅ビズンを伴ふ層序に就ては Kirk Bryan 氏がそれ〴〵説明をなしてゐる。同様にこの北米の洪積地史、古生物の研究は Edwin H. Colbert 氏及び H. Barbour, C. B. Schultz 氏等が行つて居り、就中後者は Nebraska 地方の文化をも説明したものである。

以上の如き個々の新發見の記述とは別に、本書中またこの種の研究法の新しい試みがみられる。アメリカのフィールドに於ける古地理的な研究がそれである。即ち軟體動物、主として貝類から、それを行ふ方法として、例へば F. C. Baker 氏がハドソン灣の海成軟體動物の研究から當時の氣候を考定し且つ形態の變化からその年代を推したものがあつた。H. G. Richards 氏も内陸及び淡水産軟體動物の研究から同様な試みをなしてゐる。その他近頃北歐で流行してゐる Pollen Analyse の研究がこの地に於いても見られる。P. S. Sears 氏はアリゾナの峡谷の Silts に於いて之を行つてゐるのであり、又 M. M. Leighton 氏は層序に於ける Weathering の檢出を試みてゐる。その他 Gerard de Geer 氏が年々の氷河の Varves の研究即ち Geochronologie の研究を提唱した編があり、なほ一般論として W. K. Gregory, M. Hellman 氏が一九二〇年以後發見の類人猿化石人類の齒牙を研究したもので、O. Menghin 氏が舊石器文化の系列を考へたものなどもあり。後者は氏の Protoolithikum に既に Faustkeil, Klingen, Knochen の別々の文化が

混成してゐたと言ふのである。

本文三六二頁、圖版二六葉。世の先史學・人類學・先史地理學・古生物學に興味を有する士が斯界の現状を知るに好參考たること以上の概記からこれを知り得るであらう。(藤岡謙二郎)

彙報

史學研究會

五月八日(日)午後一時より關西日佛學館講堂に於て開催、今回は特に史料の展觀を主とし、内山貞三郎氏の講演の外、外山軍治、西田直二郎、梅原末治三氏に講うて陳列品の解説を行ひ五時過閉會した。當日は雨天にも不拘、普通會員の外、一般同好の士をも加へて來會者約百五十名、頗る盛觀を呈した。

當日の講演要旨並に陳列品目錄は左の如くである。

啓蒙時代の獨逸演劇

内山貞三郎

歐洲大戰と表現主義文學とが密接な關係にあると言はれる如く、三十年戰役とバロック文學とは必然的な聯關に立つてゐる。兩者の文學がよし如何に奇怪なものに見えやうとも、前者が長い間の物質文明の毒毒——それが歐洲大戰を齎らした——に對する精神の反逆として起らざるをえなかつた様に、後者の文學は、かの戰亂の世期に於て明日の運命をも豫知しえない王侯と統治の中心を失つた民衆との奇怪にして慘虐なる現状を見た高級官吏又は貴

族智識階級人の切實なる現實的生活感情に基いてゐるのである。

さればバロック文學が一面幻想的煽情的であり、他面破廉恥にして淫亂、誇張絢爛を極めてをるとしても、その底には一種の厭世的諦觀思想が流れてゐるのであつて、其の文化の擔當者は正しく此等の諸概念に相應しい高踏的な智識階級人であつた。即ちウィーン宮廷の高級官吏であり、貴族であつたワレンシュタインの悲劇、又は Andreas Gryphius, Daniel Casper von Lohenstein, Christian Hohmann von Hofmannswaldau と其の作品等は此の間の消息を最も明瞭に物語つてゐる。かくの如くして今若し獨逸のバロック文化が中世以來の宮廷文化を高級官吏又は貴族の掌中に移行したものとすれば、次に來るべき啓蒙文化が獨逸の文化史上何を意味するかは察知することが出来る。

啓蒙文化は實に文化の流れを更らに一段と廣範な領域へ導いて行く役割を果したのであつて、十七世紀末より十八世紀末百年の啓蒙時代こそ宮廷文化(王侯)からバロック文化(上流階級)を経て市民文化(ゲーテ、シルレル、カント、ベートホーヴェン)によつて代表される獨逸古典派)を確立すべき過渡期であり、智識階級人の文化とも言ふべきものであつたのである。此の意味に於てバロック文化と啓蒙運動とは其の精神史上より見れば全く對蹠的立場に立つてゐるけれども、文化史上より見る時は全く同質的な階級人の所産であり、兩者とも未だ眞の意味の地盤、市民層と隔離してゐるが故に、其の立場は必然的に悲劇的形相を帯びてゐるの

である。

然らば獨逸の啓蒙人とは何か？ 此の疑問に對してはユルフが「啓蒙人は當時の新興科學、數學的自然科學によつて教育された理性人であり、従つて自己規定の限界を理解した社會的幸福論的考慮の上に立つ道徳人」であつたと言つてゐる。之れを私に解釋することを許されるならば、宗教改革の暗黒と抗争によつて何時か化石狀態に置かれた新教に不満を感じ、バロック文化の無力に反撥した智識人が自然科學によつて社會、即ち新たに擡頭しつゝあつた市民層に生活の指導原理を與へんとしてをつたと言ふことが出来るやう。獨逸啓蒙運動の父 Christian Thomasius 半生の苦闘は正しく此の意味に於て見るべきものである。かくてトマジウスによつて長い思想的迷路の後に發見された指導原理、理性はウォルフによつて哲學的論理的根據を與へられ、Johann Christian Gottsched によつて實踐的領域に移されて行く。然し乍ら千七百二十年代から三十年代にかけてさすがに全盛を誇つたゴットシェットも四十年代の始めチュリッヒの Breithner によつて先づ不滿の第一聲が放たれ、ライプツィヒ大學の文學雄辯の教授 Christian Furchtgott Gellert によつて密かな抗議が提出され、千七百五十九年レッシングの文學書翰第十七號によつて公然と非難攻撃される時が來た。とは言へ此等の人達が必ずしもゴットシェットと全く對立する思想圏内に移つて行つたのではなく、結局彼等とても次に來るべきシュトルム・ウント・ドラック時代へ生き抜いて行き得なかつたのは、彼等も矢張り啓蒙時代の子であつたからである。

と云ふ意味は彼等も依前として智識階級人であり、合理主義の遵奉者であつたのである。更らに換言すれば彼等とて結局は文化を宮廷から智識階級を経て市民層へ移動せしむる媒介役をしたに過ぎず、七十年代に至つて市民層が今や十全の力を發揮するやうになつて來ては最早や彼等の役割は終つたのである。私は獨逸古典派を以て個人的市民の最高峰を示すものと考へるものであるが、其の中心問題は勿論ルネッサンス以來三百年の間恐るべき重壓を以て解決を追つてゐたフマニテート精神の完全なる、しかもあくまでゲルマン民族的なる具現であつた。抑も此の重大なる問題があつたが故に獨逸に於ては十八世期末に於て未だ佛蘭西革命の影響を軽く経過することが出来たのであるとも考へられる。果して然りとせばかくの如き卓越せる個人的市民文化を形成して來るためには三百年の年齒も長しとせず、啓蒙運動を百年の過渡期と呼ぶとも短しとしなければならぬ。

二

扱て獨逸の演劇史は以上の考察を正しく裏書してゐる様に見える。既に十七世期初頭英國の旅役者を招聘し、自らも亦劇作した Heinrich Julius von Braunschweig 侯は文化が未だ宮廷の中にあつたことを示すけれども、バロックの劇作はグリウイスの Pantheismus (カルカラ帝時代の大法學者即ち高級官吏やローヘンシュタインの Sophonisbe) (ヌミチア王マシニサの寵姫)によつて代表される如く文化が上流の特權階級の手にあつたことを示す。勿論當時民間には茶番式狂言が廣く行はれてゐたけれども、それは文化

が民衆によつて維持されてゐたからではない。それは全く低級卑俗のものであつたからやがて宮廷用歌劇又は宮廷用唱歌劇に影響されて所謂 Hand und Saitenspieler なる豪華な場面を取り入れざるを得なくなつて來たのであり、かくて出來た二元的演技はゴットシェットの三一致式理論によつて更らに清算されて行かなければならなかつた程のものであつた。

啓蒙劇の第一聲はNieuwのギムナジウムの校長 Christian Weise によつて擧げられた。彼の百篇に餘る創作劇は何れも學生生徒の言語動作を薰陶し、青年學徒をして實踐生活の有能者たらしめんがために書かれたものである。此の意味に於ても既に啓蒙運動の精神をよく表示してゐるけれども、更らに彼の指導原理としたものは千六百八十八年作 Die unvergängliche Seele の中に強調してある。

Gott im Herzen, die Liebste im Arm, Eims macht selig, das andere macht warm. (神は胸中にあり、愛人は腕あり、一つは之れ至福の元、他は之れ温情の元)

の言葉に盡されてゐる。即ち信仰と夫婦愛によつて人生の幸福が得られ、満足の境地が開かれると言ふのである。此の處世訓はワイゼの指導原理が幸福論であり、實踐的倫理を強調し、自足・節慾・中庸の概念を尊重し、此れに附加するに神の攝理に對する信仰を以てしたことを意味する。然しこゝで神の攝理が説かれてゐるのは正しく前時代の遺産であつて未だ此れなければ當時の智識階級人と啓蒙されるべき一般民衆を結ぶべき紐帯がなかつたか

らである。然し次の世代に入つてウォルフの理神論が出て以來、ゴットシエトに至つては既に合理主義の旗幟が全面を壓するに至つた。唯だ茲に注意すべきことは智識階級人と市民層とを結ぶものが不必要になつたから「基督教」が捨てられたのではなく二者を結ぶものが益々必要になつたから理性論が智識人の間から起つたものとしなければならぬことである。

然らばゴットシエトの代表してゐる啓蒙的文化人の姿は如何なるものか？彼の創作劇 *Agnes* は此の問題に最もよく答へてゐる。

此の劇がスバルタ王の悲劇であることは、作者がまだ前時代の宮廷文化及び其の代辯であつたバロック文化の後繼者なる智識階級人であることを暗示してゐるけれども、劇中の主人公アグネスが社會改革に乗り出して失敗し悲惨な最後を遂げてゐることは、作者が文化を上流階級から民衆の手に歸さんとして改革運動を起して一敗地に塗れたと同じ経路を示してゐる。然し此の劇の眞の意味は實にアグネス王が社會改革を起して救濟せんとする對象である「市民」即ち民衆が獨逸劇に始めて問題を提供して來たと云ふ點にありしかも此の民衆によつて却つてアグネス王は慘殺されるのである。當時啓蒙人が民衆の味方たらんとしてしかも未だ民衆そのものゝ中に堅い地盤を占めてゐなかつたことを餘りにもよく示現してゐるではないか！然し乍ら市民階級が眞の悲劇の中心人物となるには未だ長い期間を要した。

ゴットシエトの次の世代を代表するゲレルトの所謂 *Comedie Jarmoyante* 「涙の喜劇」なるものは人情喜劇であるから、傳統によ

つて人物は悉く市民階級であるが、其の「涙」なるものが啓蒙文化の徐々として其の本質を變化して行く道程を示すものとしても、其の「喜劇」なるものは文化の形態が崩壊して行く姿ではない。されば智識階級文化が市民階級文化へ移つた時は何時か？實に獨逸演劇史上十全なる市民悲劇が誕生した時こそ其の時であつて、智識階級の文化を象徴するゴシック式書齋を出て巷の中へ人生探求の旅にのぼるゲーテのウルファウストの主人公の悲劇こそその代表である。

ゲレルトは *Die Zürlichen Schwärmer* (やましい姉妹) に於て四十年代の啓蒙人の精神的立場を極めて明瞭に解剖して見せてゐる。劇中姉のユールヘンは從來の合理的倫理觀の故に自分の戀愛を失ひ、妹ロットヘンは戀愛を退けて友情を固執する點に於て傳來の道徳である中庸節慾の概念を更らに純化してゐるけれども、それが忽ち嫉妬の激情に飛躍して了ふことによつて、却つて其の戀愛を獲得することになつてゐる。茲に合理主義に對する非合理主義の反撃が見られるけれども、然し此の感情的倫理觀、自由精神の暗示も當時にあつてはまだ一種の指導原理、觀念的存在として把握されたに止まり、眞の實感としての發展ではないのである。

次いでレッシンクに於ても、よし彼の業績が如何に感情の優位を説いてゐるかに見えやうとも、結局ゲレルトと同じ啓蒙時代の知識人の所産であり、觀念より實踐への理智的傾向を帯びてゐる。獨乙第一の市民的悲劇と呼ばれる彼の *ミス・サラ・サムプソ*

ンもサラの所謂「不幸なる情熱」啓蒙運動の合理的倫理觀との闘争を寫したものであつて、既成の啓蒙文化の辛辣な批判であつても、新時代への飛躍ではないのである。否、飛躍と云ふよりも彼は其の偉大な批評的精神を以て啓蒙文化の末期の缺陷を残りなく見たが故にそれを啓蒙思想圈内に於て出来る限り訂正補強しやうとしてゐるやうに見える。次いで千七百七十一年—二年にかいたエミリア・ガロッテは依然として半宮廷半市民的悲劇であつて、前時代の傳統を牽いてゐるし、其の構想用語もゲーテがヘルデルに書かれてゐる如く「頭で考へた作」である。成程五十年代以來ゲレルトの諸劇が示す如く合理的倫理觀は非合理的感情論に非常な妥協をして來たのであり、エミリアの抱く倫理も敬虔主義に基く Frommigkeit, Gehorsam とを婦女子の最高の徳としてゐるけれども、彼女が自ら父親に殺されんことを願ふのは此等の徳がプリンツの横暴とグリマルデ家の淫蕩生活によつて破壊される恐れのあることを自覺したからである。即ち作者は此れによつて決して悟性に對する感性の優位を支持してゐるのではなく、悟性論に對して感性論が如何に強力な敵であるか、而して如何なる手段を盡しても此れを防衛すべきものであることを教へてゐるのである。

更にレッツシングの「賢者ナターン」の中に言葉を盡して説かれてゐる「寛容の精神」は正しく啓蒙人の達した最高にして最後の合理的倫理觀である。此の精神こそ啓蒙時代初期に於てワイゼによつて説かれた幸福、自足、中庸、節慾の概念が發展して行つた最後の姿であつて、新たに擡頭して來た市民的共同體の文化に對して孤

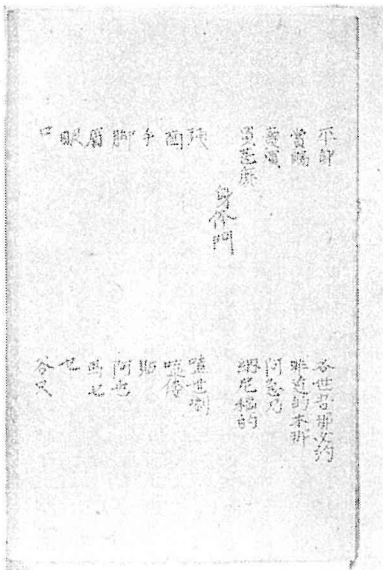
立した知識階級人が讓歩訂正を餘儀なくされて來た最も洗練された、然し乍ら他面崩壞の一步手前迄追ひ詰められた指導概念である。何故かと言へばかの中庸、節慾の概念はゲレルトによつては既に見た如く誠實、友情の概念に展開せしめられ、誠實、友情の概念は今や共同體の文化を維持するための人間愛及び人間愛から出る互讓の精神即ち寛容の精神に迄發展して行つたのであつて、劇中一見見るが如く、此の精神は宗教上の信仰の問題ではなく、依然として啓蒙人の根本思想である「徳」の問題であるからである。

かくて結局ゴットシェトとレッツシングは獨乙文化史上の流れから見ると同質的の作家であり、前者が啓蒙文化を樹立したものとすれば、後者は守成よく十年の延命を謀つたものと言ふべきである。然し七十年代既に若き世代にあつては數學的自然科學に基く合理主義の代りに遠く敬虔主義に廻ることの出来る感情論が、此れを演劇史上より見る時は佛蘭西劇に代るにシエークスピア劇が漸次交代しつゝあつたのであつて、舊い知識階級の文化形態はロココ文化の中に末期の哀音を響かせ、新しい市民階級の文化がシュトルム・ウント・ドラングの運動によつて黎明の警鐘を亂打し始めたのである。

附記、本稿は極く簡単な梗概丈に止めたので意を盡し得ないことを残念に思ひます。小論獨逸文學研究一九三五年版非合理主義と市民的悲劇の誕生、及び獨逸文學第二年第一輯演劇史上より見たる獨逸啓蒙運動の文化形態に委細を論じておいたからです。(内山氏手記)

阿波國文庫華夷譯語に就いて 外山軍治氏

華夷譯語といふのは明清兩代に互つて作られた一聯の外國語字典ともいふ可きもので、史學、言語學何れに於いても重要な價值と興味とを有つてゐる。色々の異本や系統付けが考へられるが、徳島市光慶圖書館に寄託された「阿波國文庫華夷譯語は十三ヶ國語々彙を具備し、さる昭和四年神田喜一郎氏及び長澤規矩也氏の採訪によつて世に紹介されて以來、其の性質の優秀なものであることが知られてゐた。然るところ今四月、羽田博士の命によつて、外山軍治氏これが全部の寫眞撮影と（凡四百四十葉調査とを完了するに及び、果して國內傳存の譯語中にあつては最も優秀な一聯のものであることが確められ、國外に比を求めても、僅かにハノ



イ極東學院所藏のものが匹敵し得るかを考へられるに至つた。詳細に就いては尙今後篤古の士の研鑽に縦されるであらうが、兎も角この貴重すべき資料を將來し得たことを普く告げておかうと思ふ。（寫眞は「阿波國文庫」不日本館譯語の一頁）（今西記）

觀尊について 西田直二郎氏

元寇がわが國未曾有の國難として鎌倉時代の國民精神興隆の爲の大きい機縁となつたことは今更言ふまでもなく、かの建武中興の大業の如きも亦その結果によるところあるは既に入々の説くところであるが、然も最近大阪に於て元寇展を開くに際し偶目の機を得た多數の史料によれば少くとも九州地方の武士の間にあつては元寇の會戰以後も永く異國警固の軍役が續けられ、その間には絶えず一族相争ふことあり、元弘建武の戰亂に至るまでの間實に一聯の出來事であつたことが如實に知られる。西大寺觀尊の事蹟はかゝる時代の背景に於て理解されるべく彼が元寇に際して石清水八幡宮の寶前に於てなした祈禱の注文は現に西大寺に藏せられ、その筆になる感身學生記は時代の國家意識を考へる上にも注意すべきものである。その濟世救民の行業としては宇治橋を架けその恩賞にかへて宇治川網代禁止の勅許を得たことは有名であるが、その造立せる十三重塔下より發見せられた經筒以下の諸品は現に橋寺に藏せられてゐる。陳列品左の如し。（紫田記）

- 一、宇治浮島十三重塔趾發掘品
- 一、銅製經筒 一個
- 一、金銅製小經筒 一個

橋寺放生院藏

- 一、金銅製舍利塔 一基
- 一、蓮臺形金銅香合 一個
- 一、銅製五銖銚 一口
- 一、經 軸 十二本
- 一、水晶五輪小塔 十三基
- 一、金銅小花瓶 一口
- 一、紺紙金泥經 十卷
- 一、鐵製函 一個

奈良 西 大 寺藏

- 一、伏見天皇勅詔
- 一、徽章消息 三月二十一日
- 一、異國襲來祈禱記錄
- 一、興正菩薩行實年譜
- 一、金剛佛子寂尊感身學生記
- 一、八幡愚童訓
- 一、大日本國南京西大寺緣起
- 一、立花家文書
- 一、比志島文書
- 一、廣瀨文書
- 一、來島文書
- 一、中村家所藏元寇古文書
- 一、滿願寺文書
- 一、北條時宗畫像

- 正補五册
- 一册
- 二册
- 一卷
- 伯爵 立花忠寬氏藏
- 公爵 烏津忠重氏藏
- 二卷
- 二卷 廣瀨正雄氏藏
- 九州帝國大學藏
- 一卷
- 中村惣次郎氏藏
- 一卷
- 熊本滿 願 寺藏
- 一幅

一、滿願寺別當坊歴代並諸記 一册

以上

近時に於ける百濟遺蹟の發掘

梅原末治氏

百濟遺蹟の調査は半島の他の史蹟と同様明治の末年から關野博士の手ではじめられた。そして其の故郷の扶餘にあつては正四年と六年との兩度の調査に於いて陵山里の傳王陵の發掘其他に見る可き成果を示し、百濟後半の文物を推す上に基本的な資料を提供したのであつた。併し同地の古墳墓等は高句麗のそれと同様早く唐兵の爲に徹底的に盜掘されて、全く内容を失うてゐることが分明了ので、爾後の半島の史蹟調査は専ら北の樂浪古墓と南新羅積石塚の發掘に向けられる傾向をとり、他は殆んど顧みられないことになつた。處が昭和の六七年頃になり、兩地方の調査が進んで新事實が影しく現はれたにつけて、比較考察上右の關却された方面の知見が必要となつて來た。恰も此の際百濟では公州の宋山里で壁畫を描いた塚築の珍らしい古墳が發見されて注意を惹き、同地方遺跡調査の再開を促進する機縁を作つた。

此の調査は朝鮮古蹟研究會の事業として、昭和十年から開始、先づ百濟佛教遺跡として扶餘軍守里にある慶寺跡を發掘したが、それが翌年秋に至つて、我が攝津四天王寺跡と全然同一の伽藍配置をとつてゐることが明にせられて顯著な業績を齎し、ついで昨年四月には同じ扶餘の窺岩面の一廢寺跡にて多數の畫

甄を發見、うち山水畫其他を現はした美術的價値の高い優品を存します。同地への關心を高めるに至つた。

講者の今春の調査はその後を承けたもので、同地陵山里の傳百濟王陵に近接して新たに所在の知られた五基の古墳を發掘精査したのである。是等はやはりすべて盜掘せられてゐたが、而も二十年前に較べて著しく進歩した調査の方法に依つて構造の全貌を究める上に種々の新知見を齎し、其の最も大きい一では底部に水抜き設備のあることが確められたし、また他の一からは細金細工の飾を加へた茄子形玉蓮瓣透座の步搖、多量の金糸等の殘留品を得て、當代文物の片鱗を窺ひ得るものあり、また所期以上の好果を收めたのであつた。同地の調査はなほ今後も續行の豫定である云々。(梅原手記)

此の日別室に陳列せられた關係の發掘品は次の如くであり、講演に當つては是等の實物を示し乍ら解説せられたのであつた。

- 一、平守里廢寺趾發見軒圓瓦(單辨) 四個
- 二、窺岩面廢寺趾發見鳳風文埴 一個
- 三、岩座鬼形文埴 一個
- 四、渦雲文埴 一個
- 五、人物山景文埴破片 一個
- 六、陵山里東古墳群第三號墳發見
 - 一、金糸 括
 - 二、黃金丸玉 三個
 - 三、琥珀丸玉 一個
 - 四、細金細工冠帽茄子形飾玉 二個
 - 五、金銅座金具 二個

京都帝國大學國史科春季見學旅行記

第一日(京都—今津—遠敷—小濱)

一同が八時半三條京阪に集つた時は、まだ本州の前後に先日來の副低氣壓が低迷してゐて曇り勝ちな氣づかほしい天氣だつた。一同とは、西田、藤、牧野先生、大學院關係は九名、學生の方では三回生三名、二回生十名である。濱大津に着いて見ると折角五月號の時間表で調べた時間が又變更されてゐて、幹事の面目丸潰れ、電報を打つやら、驛長室に問ひ合はすやらして、漸く十時三十分の電車に乗つた。豫定より遅れること、五十分餘、此處で御見送り下さつた牧野先生に別れ、柴田先生が加はられた。

豫定變更の御蔭で時間うめ合せ上、安曇に下車して藤樹書院に向つた。正午前、驛より十五六町の道を二十分で突破して、藤樹神社に參拜、玉林寺の墓に敬意を表し、所謂藤樹の名の起りである先生遺愛の藤の樹の下をくゞつて、書院に着いた。正面に「徳本堂」、横の方には「致良知」の額がかゝつてゐる。正面、先生の靈を拜してから院内に飾られた遺品を拜觀する。着物・書籍——笹竹は先生自作のものださうである。奥の方に、日獨戰爭で山東から持ち歸つたのを寄附されたと云ふ青銅の孟母坐像がある。

僅かの時間なので心せくまゝに、豫定の中食を變更して、日盛りの道を驛まで大急ぎで歸つた。道で誰か落したバット二個を子供が拾つてくれた。「落ちたるを拾はず」——藤樹先生の遺風はま

だ残つてゐるといふのだらうか。

安曇を出て、今津迄の僅かの時間の中に、野道を歩いて渴いた喉に中食を詰込んだ。今津では自動車交渉に可成時間をとつたが、文明の利器は、長い道中も何のその、若狭街道を上り水坂峠を越え、一瞬にして、近江より若狭に入った。午後三時すぎ國分寺に着いた。此處で豫定よりも約二時間遅れてゐたので後の見學の事を考へ、忙しい見學をせねばならなかつた。

本國分寺は、所謂聖武天皇の勅願により天平年間定められた國分寺の一つで、行基菩薩の開創と傳へられる。現在寺域の東南隅に塔婆の趾と云ふ自然石の礎が残つてゐる。又出土した國分寺瓦とつたへる中、軒平瓦の一個は奈良朝時代のものである。又、國分尼寺にあつたと傳へられる瑠璃光藥師如來は、國寶に指定せられ、現在藥師堂に安置せられてゐる。高さ三尺七寸の坐像、顔貌端麗衣紋流麗にして強く、眼は切れするどく唐佛の面影がある。寺傳には春日作といはれてゐるが恐らく平安中期を下らぬ作である。この兩脇の彌陀と釋迦二尊像は、寺傳行基作と云ふが、平安末から鎌倉初期にかけてのものである。本堂の釋迦如來は可成大きいが頭と胴部は年代が異なるやうである。恐らく弘仁期に奈良期の仕法を模して作つたので蓮坐は多少後れるやうである。

寺傳によれば中頃しばらく廢頽に歸してゐたが慶長年間に再興され慶長八年仲春、國分寺再興勸進一通。慶長十四年二月、釋迦堂勸進帳一冊○材木願七通○材木入田註文一通、釋迦如來の光背も修補されたのであらう、堂もその時のものと云はれる（國分寺

大佛後光再興供養之時の立札扣一通）。多分この頃作られたのであらうと思はれる伽藍圖が一幅ある。この頃の寺塔を描いてゐるのであらう。朱塗の樓門・釋迦堂・寶塔・櫻姫社・聖堂・尼寺・護摩堂等が描かれてゐる。この外、戰國末から徳川初期の頃のものと思はれる二三の佛畫像及文書が少しある。歸りに鐘樓に攀ち上つて鐘の銘を寫し取つた。

「享保二龍集丁酉初秋。中漸。法師幸海謹識

（願文略）
洛陽三條釜座住治工、近藤丹波大椽藤原藤久」

もう四時半をまはつてゐたので急いで若狭姫神社へ自動車を走らせた。着いた時、木の繁つた神社の境内は、もううす暗くなつてゐた。

本社は國幣中社、若狭國二ノ宮で、祭神は若狭姫神（傳豐玉姬）龍前村にある彥神傳、彥火火出見命をまつる一ノ宮と共に、今日では若狭彥神社の上・下宮と稱せられてゐる。元正天皇靈龜元年に垂跡すると云はれ、一ノ宮として代々の國主の崇敬が篤かつた。若狭水と云ひ産屋傳説といひ、之等がやがて彥火火出見命の話とむすびついて來たのであらう。中世、神宮寺との關係多く、今日つたはる般若經六百卷は、空海の筆と云はれてゐる。黄麻紙に一行十七字に寫された此の經は、その九十一卷から百卷まで拜見することが出來た。寺傳の空海筆は當らずとも平安初期を下らないと思はれる。筆勢は天平の強みをはなれ漸く日本風になつてゐる。拜見することを得た十卷の中にも、二三別筆がうかがはれる。之には延寶三年、國主酒井忠直が發願して家臣佐橋氏に修理

せしめたとの延寶四年丙辰五月付の記(僧寶靈尊)がある。社寶の國寶三條宗近の太刀は、東京へ出陳中で、西依成齋の記と、寫眞で満足せねばならなかつた。併し古い社だけに系圖や記録がよくのこつてゐる。若狹國鎮守一、二宮號^{上下}社務代々系圖一卷は、社務牟久氏の初代節文より代々の詳しい横系圖で、特に、初代より十四代(最盛)に至る間は(その終りに元徳のことを記すにより)、鎌倉末に筆寫されたものであらう。其後は、數筆の新たな書繼を経て明治に及んでゐる。之と關聯して見るべきは、最近本社に入つたと云ふ繪卷(題名、奥書なし)であらう。この一卷、初めに黒袍東帶の初代節文(書中笠朝臣節文と記す)が社を拜する圖を描き、だん／＼に鎌倉時代風な緣起的繪卷がつゞく、そして「二宮御垂跡所」「正一位勳二等若狹大明神」「明神假殿所」「遍歴覽當國中神鎮地所」等の文字が上や下に記されてゐる。ついで突然人物が一枚づゝに書かれた繪系圖になる。それ／＼人物に特徴がよくあらはされ、節文・後文・豐文・延景・景景・景遠・景安・利景・景尚・景繼とつゞいてゐる。こゝまでは同一筆と思はれる古いものである。この最後の景繼は前の社務系圖によれば十二代で、正安年中に死んでゐる。恐らくこの繪卷もそれを去る遠からざる時に寫されたものであらう。光景以下の繪傳は新しく正房に至つてゐる。なほ新しい系圖として明治十一年十一月の舊社務系圖ノ寫(榮春寫)一冊があり、初代節文靈龜元年御鎮座の時社務となる以下の事を記し三十四代(名ハ徳)に至つてゐる。なほ牟久氏は今日について現在京都室町今出川に住まはれる由である。

社、自身の記録としては「若狹神社舊記」(寫本一冊)明治九年編纂のものがあり、上下宮以下の神事を記し緣起と稱するものゝ寫しを含んでゐる。又明治十四年頃の編纂にかゝる寶曆四年(當時の社務は季文)以下、徳川時代を通じての社事を記す、舊記一冊がある。特に注目すべきは名高い「詔戸次第」で一卷、奥に乾元二年卯月二十一日とあり、上下宮の御祀の詔を收めてゐる。詔戸に付された假名に古體のものが多し。又「御兩社緣起」(本名、若狹彦若狹姫大明神、祕密緣起)一卷は、奥書はないが、足利末頃の字體で、古體の假名をもち、中に産所^{ウツボ}のことを鶴葺屋^{ツルギヤ}と記してゐる。こゝに此の邊の産所の習慣と鶴葺草葺不合命との連關の糸が發見されさうである。

色々珍しい記録に時間を費して、五時迄の豫定が六時になつてしまつた。それでもまだ日は落ちない。貸切のやうになつた自動車はまつしぐらに小濱に走つて行つた。町立圖書館のある小學校では先生方が遅くまで居残つて下さつて、茶をくんで下さつた。三品先生が舞鶴から來て待つてゐられた。待つ間もなく、既にならべられた博物館へ這入つて行つた。地方の町としては珍しく、らゐに色々のものが集められてゐる。其の上役場の方の盡力によつて、長井・伴・川村・高村・松見等の諸家より集められた貴重な文書が我等を待つてゐた。

寫本、刊本は多く松見家の出陳で、若狹關係のものが多し。○若狹守護代記一冊○若狹國志寫本五冊○若州良民傳(寫本二冊)○若狹風俗○若狹群談○稚狹考○若狹郡縣志(三冊)等々。

又義門關係のものでは、類聚雅俗言(一册)○於乎輕重義一册○活語指南(二册)等、軸物・屏風等には、伴信友・梅田雲濱・東條義門・西依成齋等のものが、集められてゐた。

古文書は、長井・伴・高村・祖屋家からのもので秀吉關係のものが多かつた。○御捷追加(文祿四・八・三)一通○御捷書寫一通○酒井忠門墨付御判物(貞享五・四・七)一通○太閤朱印一通○羽柴筑前書狀(淺野彈正宛)一通○朝鮮國御仕置の覺(文祿二・五・廿)之は、釜山浦、熊川、から島等軍陣の人數を註したものである。外に、秀次・如水・信玄等の書狀あり、最も注目すべきは最後に置かれてあつた有名な祖屋文書で秀吉の右筆山中橋内が名護屋の陣中より大阪城中の豊公女中に宛てたものである。天正二十年正月、秀吉が征明の軍を起して約半歳、五月二日には行長が京城に入つた。この感激を盛つて、「かうらいのみやこ、すきつる二日にらつきよつかまつり候」と書き出してゐるこの書狀は、當時の秀吉の抱負を如實に物語つてゐる。前田家所藏の文の中に同日付の秀吉より秀次に宛て東亞席捲の雄圖を説いた書狀があるが、その内容から云つて、恐らく山中橋内は、それを認めてからこの書狀を書いたのではなからうか、殊にその書き初めに「びんき候まゝ一筆申まいらせ候」とあるのは、同飛脚によつたものかも知れない。秀吉の雄圖は、挫折し、この書狀の内容は、結局とらぬ狸の皮算用といふことになつたが、如何に當時の日本人の氣宇の大きかつたかどうかがはれる。

「につぼんのていはうさまを、からのみやこへすゑさせられへき

あいた、その御よういあるへきよしおほせあげられ、すなはち、たいり御りやうしよとして、みやこまはりにて十かく御しん上なされ、そのうちにて、しよくけしゆへも、しはいなさるへく候、下したひのしゆ十さうはい、上のしゆはしんたひ身代により申へきよし御意候」と云ひ、天皇の去られた日本及高麗(朝鮮)の主を定め秀次を唐の關白とし、秀吉自身は、「にんほうふ(寧波府)へ行つて更に天竺へせてゆく、即ち、「こんと、御先つかまつり候しゆは、天ちくちかきくにともくたされ候、そののちは、うへさま御ことはをくわへられずとも、なるへきほと、天ちくきりとり申候やうにとのきよい候」とある。「一番面白いは、「てるもと、とさのし、う、さつまのし、う、ふんこのし、う、此めんくこらうにてほんこくかはり候事めいわくがり申べく候まゝいつまでも、そのまゝおかせらるへきよし候、よ余のしゆは、十さうはい、廿さうはいのちきやう下されつかわさるへきよし候、てるもとなとに十さうはい下され候へは、御くにのしはいもならず候まゝ、ほんちをおしみ候事、うへさま御まんぞくとこの御りこうに候事」とあつて、毛利輝元・長曾我部元親・島津義弘・大友義統等は、十さうばいの土地をもらふよりも先祖代々の地を守らうと考へた事、又、輝元などの大きい大名が、更にその十さう倍もの地をもらつたら到底治め切れないだらうからいらないと云ふのだと秀吉が笑つたと云ふのである。秀吉の面目躍如たるものがある。

なほ文書では、伴信友の書狀集や雲濱の書狀、佐久間象山の長い海防意見書、又、長井氏の先祖が内藏助の舅、石來源五兵衛か

らもつたといふ、「青柚漬の覺」といふ大石内藏助の筆蹟といつたものがあつた。

これ等を大意で見て終つたのが七時半頃だつた。通知しておいて先方で用意してゐて下さるのをすつぽ抜かす事も出来ないもので、もう暗くなつた町を歩いて、すぐそばの八幡神社へはいつた。後に後瀬山が、くら／＼と聳えてゐる。社務所が何處かわからぬ程くらくなくなつてゐた。本社に既に續日本紀・神護景雲四・八ノ條に記事があるといふから相當古いものであらう。一色・丹羽・淺野氏の支配を経て、酒井氏が國主となるや代々その崇敬をあつめた。丹羽五郎左衛門の禁制、福井家代々の判物は之を示してゐる。社の歴史に就いては、八幡宮由緒書(延寶三三乙卯十一月)や八幡宮記等がある。後者には、寶龜三年朔日よりその沿革を記し應永二年八月一色詮範、鳥居造立の事等が見える。この外木下勝俊、近衛基經等の筆蹟(三十六歌仙)等があつた。

もう八時もすぎた、七時着と世組屋の方へ通知してあるので電話をかけておいて、町の西端にある高成寺にむかふ。だん／＼山にむかつて高くなつた寺域に、禪寺らしい建物が夜のやみの中に静かにならんでゐた。本寺は高氏の暦應年間の安國寺の一つとして、大年和尚を開祖とすると傳へる。大年法延は、椿庭海壽と共に、渡來僧竺仙梵仙の弟子である。梵仙は南禪寺十六代、椿庭は、四十六代の住持である。従つて、拜覽した中に、竺仙和尚の法衣の環があり、守端椿庭を送る詩、法延の遺狀(貞治元・八・一)があつた。大年法延の自序(觀應二・八)をもつ西山履戦集三卷は、奥

に、「寶曆十一年十月初二日、周防國泰雲寺ニ得テ之ヲ納ム、安國高成寺」としてのことである。なほ高成寺の名は、尊氏の將、大高伊豫守重成が中興したので、その名をとつたものである。兆殿司筆の違磨像、又足利時代と思はれる廿八祖像、更に後れるものに、後小松院御影像○忠勝書狀○細川幽齋書狀等があつた。

忙しい／＼、一日の盛澤山な見學を了へたのは、もう九時すぎだつた。世組屋からの迎への提灯につれられて宿へ落ちつき、廣間に並んで遅い夕飯をすませると、もう九時半をすぎてゐた。

〔酒井忠雄記〕

第二日(小濱・敦賀・木本・長濱・京都)

午前八時二十四分小濱驛發、天氣快晴にして申し分なき旅行日和である。九時五十三分敦賀驛着、直にバスにて櫛川村に至りてより徒歩約八丁にして西福寺に着く。同寺は京都黒谷の末寺にして應安三年良如上人の朝廷に奏請して創立する所、數多の寶物を藏す。今其の中から主なるものを摘記せんに、天平五年三月三日史安麻呂の奥書ある大般涅槃經卷第二十九、天平十二年五月一日附光明皇后御願になる七佛所說神呪經卷第三及び同奥書ある七佛十一菩薩說神呪經卷第一、天平寶字七年九月七日已知石万呂の奥書ある大般涅槃經卷第二十九を始め其の他聖武天皇孝謙天皇御宸翰或は傳教弘法の筆と傳ふるもの等寫經總べて三十二卷何れも奈良平安朝の雄渾なる筆勢を眼前に示してゐる。又古文書では後花園天皇文安三年の繪旨を始め、將軍義持義教の御教書、京極忠高

書狀並に禁制、梶井宮御祈禱願文等等殆ど其の數を知らず、主夜神影の宋畫・唐張思恭筆と傳へる雲中彌陀の影像、惠心僧都の作といふ當麻曼陀羅等の國寶と共に我等の眼を驚かさぬ物はない。

拜觀豫定一時間は瞬く間に過ぎ去り充分見學の出來ないのを残念に思ひ乍ら寺門を出る。寸暇を得て氣比神宮に參拜せんものと考へてゐた一縷の望も今はあへなく消えて發車のみ心にかゝる。バスは海岸の絶景を尻目に神宮一の鳥居前を過ぎて驛へと急ぐ。驛着三分發車。車中晝食。午後一時十四分木ノ本斎、淨信寺に至る。

此寺は俗に木ノ本地藏と稱し白鳳元年祈運法師勅命に依り難波の浦に漂着せる尊像を當山に安置したるものと云ふ。本尊地藏菩薩像は木像の雄大な作で、前面よりは御顔のみしか拜するを得ないが、相好圓滿鎌倉時代の優秀な作である。寶物又多く、若衆の將棋に興ずる狀を描いた浮世繪屏風(二曲半双)を始め伊勢物語祕書、彌陀來迎圖、小倉山硯、賤嶽合戰記、秀吉奉加帳、地藏菩薩畫像等あり、故あつて當寺に保管されてゐる國寶金蓮寺本一遍上人繪傳十卷をも一覽することが出來た。尙阿彌陀堂には鎌倉時代の優作阿彌陀像が安置され光背は殊に見事である。

之よりタクシー五臺を運ねて芳洲書院に至る。雨森芳洲の遺物を多く所藏する。時間少き爲其の中の極一部のみを見せて頂く。津島叢書鐵寇新議等其の主なるものである。再びタクシーにて渡岸寺に到る。觀音堂として國寶の十一面觀音像を本尊としてゐる。木造で表情溫雅、曲線優美一面に和やかさを漂はせ、鼓胴形の耳環も他と異り稀に見る優作である。寺傳に依れば聖武天皇四民の

疾苦を憐み刻ましめ給ふ所と云ふ。傍には大日如來像が安置されてゐる。拜觀後五分間を利用して境内にて記念撮影を行ふ。

高月驛より乘車長濱に向ふ。午後四時十分長濱着。驛頭町役場より出迎を受け下郷共濟會文庫に至る。休憩室にて同文庫主事の長氏より本會事業に就いての簡單な説明あり、八幡神社の曳山神事の寫眞等拜見、庭園にて記念撮影をなし直に鍾秀館に入る。コンクリート三階建の中には數多の古器物古文書を藏し到底全部を短時間に見盡くす事は出來ない。文書記録の中比較的著しいものを擧ぐれば秀吉書狀、清正書狀、巨勢庄文書、天正三年信長文書、賤ヶ嶽古戰場圖、二條爲冬卿の源氏物語、管仲記、明月記等である。時間が少いので一通り見學後直に舍那院に向ふ。天氣や、崩れかゝり黄昏が早くも迫る。舍那院は弘仁五年弘法大師の創建に係ると云はれる。寶物は愛染明王畫像一幅、三月經曼荼羅圖一幅、秀吉書狀數通である。本尊愛染明王坐像は八幡神社の本地佛と唱へられ鎌倉時代の優作、又阿彌陀坐像がある。續いて隣接せる八幡神社に參拜する。本社は後三條天皇の勅願により延久元年源義家の勸請にかゝると云ふ。社務所に上り寶物を拜觀する。後奈良天皇繪旨、將軍義教密進狀一通、秀吉朱印狀二通、秀吉畫書一通、天正三年三月十三日附掟、石間木工以下連署の書狀一通、秀吉下知狀一通等である。十數分にして辭去、是より長濱別院大通寺に向ふ。暮色漸く蒼然として疲勞の色亦顔色に伺はれる。駐足せんばかりにて大通寺に到着寛永十六年宣如上人の創建と傳ふ。本堂廣間を始め諸の堂宇は多く國寶建造物で豪壯なる桃山時代の佛を

留めてゐる。又有名なる含山軒の庭は遠く伊吹山の優姿を巧に取り入れたもので、庭園藝術の妙を示して餘りある。本寺には尙他に蘭亭がある。寶物としては伊井直孝書狀一通、伏見宮御遺物、公宣案三通、伊勢物語寫本、他に寫經等がある。之等を拜觀後愈々最後の寺知善院に向ふ。本寺は元淺井郡尊野村にあつたが、淺井亮政小谷築城の後大谷の地に移されたが、秀吉長濱城に封ぜられるに及び天正二年住僧舜慶僧正をして今の地に移さしめたのである。本尊阿彌陀像脇侍日光月光像が安置されてゐる。其の他曾呂利作と傳へる秀吉坐像、菅公像、秀頼筆なる豊國大明神の神號、淺井氏消息等拜觀、終つて再び共濟會文庫に引返す時に午後六時二十分。休憩室にて夕食の御馳走に預り一同有難く頂戴する。午後七時五分バスにて米原へ。七時三十三分米原發、八時五十五分京都驛着。解散。

茲に極めて急がしくはあつたが得る所多き春の見學旅行を無事終了する事が出来た事を心から喜ぶ。

最後に御多忙中我々の爲に種々御便宜をお計り下された各地の諸氏對し厚く感謝の意を表して筆を擱く。(玉田記)

國史學會大會

五月七日(土)午後一時より樂友會館講演室に於いて開催。司會武藤誠氏。同五時半盛會裡に閉會した。當日の演題及講師は左の如くである。

- 一、閉會の辭
- 一、近世の日本儒教

西田直二郎氏
龜井伸明氏

- 一、中世村落の集團性と其時代 田中 稔氏
- 一、飛鳥時代の藝術について 東伏見邦英氏
- 一、近世初頭の統一的精神について 福尾猛市郎氏
- 一、埃飯と武家の特色 出雲路通次郎氏
- 一、我が國の古佚書について 池田源太氏
- 一、閉會の辭 藤直幹氏

讀史會

新入會員歡迎會 五月十七日南禪寺天授庵に於て開催、古文書拜觀後午後七時晚餐を共にす。西田教授御訓話の後各自自己紹介。出席者三十二名。

例會 六月十七日午後七時四十分樂友會館に於て開催。西田教授以下三十六名出席、研究發表左の通り、午後十時閉會。

- 一、中世的傳承と淨土教 二回生 今中 桂二君
- 一、大阪小橋の遺蹟に就いて 三回生 羽田 秀典君
- 一、歴史地理に就いて 大學院 内藤 晃君

神道史研究會

第三回講演會 五月十一日(水)午後七時より熊野神社に於て開催。

- 一、宇治神社と縣祭 林屋辰三郎氏
 - 一、御園神社の祭祀 出雲路通次郎氏
 - 一、起請紙に就いて 中村直勝氏
- (尙以上の講演は追つて發行される雜誌「神道史研究」に所)

載の豫定)

民俗學會

五月例会 本年度最初の例會は西田、梅原、柴田三先生、諸先輩、學生に加ふるに學外からも數名の同好の士の參會を得て、五月二十日、樂友會館に於て開催。高谷氏、梅原先生の御講演、西田先生の御批判等を伺ふ事が出来、更に先生方を中心にお話の華が咲いて時の移るのを忘れた程の盛會であつた。

概念的に過ぐる摘記ではあるが當日の講演に就いて少しく紹介すれば、

農村語彙を讀みて

高谷重夫氏

農村生活の一年を貫流するものは言ふ迄も無く農事に關する年中行事であるが、農事といふ概念を狭く純粹に經濟的な意義に限るのは抽象であつて、具體的な農村生活に在つては、其は諸種の生活感情と密に關聯して居る。

經濟的といふことが單に物質追求的行爲をいふなら、農事とは之をも含む更に廣大な生活の全體で、強ひて之に統括的概念を用ふれば、呪術的宗教的とも言はる可きであらう。

斯くの如き農村の生活に於て、種々の事柄や物に附けられた名前をば農村語彙に見出すわけであり、従つて其等の言葉は夫々農村生活の様相を表現すると言へる。

いま、其等の中から特に一群の言葉を拾つて農村生活考察の據

所とし度い。さて其の様なものとして試みに田の神信仰に關する言葉を取つてみる。

吾々は先づ田の神を意味する名辭の多様性を見出す。嘗に地方的分布に於て多種であるばかりでなく、又同一の場所で異なる數種の名辭の使用を見るのである。これは言ひ換へれば、田の神信仰の對象の名が極めて融通性に富んでゐるといふ事實である。この事は一見田の神信仰の何ものたるかを考へんとする者を當惑せしむるのであるが、更に考ふれば、却つて斯かる事實そのもの、中に田の神信仰考察への重要な手懸かりが潜んでゐるのではあるまいか。

即ち、この事から、農村生活に於ける田の神なるものが特定の物象に即して發生せしめられたといふよりは寧ろ農事的祭儀の不斷のはたらきが時あつて適宜の對象に固定したことを推察させられるやうに思ふからである。従つて、もと必ずしも田の神信仰としてあつたわけでないものが、農事的祭儀との關係から、漸次に田の神信仰の對象として採用されるといふ場合もあり得たのである。

此の假設にして大誤無いとすれば、田の神信仰を表はす名辭の分析よりして信仰對象たりしもの、究明を試みんとする企ては決して事態の全貌を明らかならしむるものではあるまい。従來先學によつて爲された田の神信仰の研究も必ずしもこの誤を犯さなかつたとは言へない。従つて其等に對して部分的効果しか期待できぬのは當然と言はねばならない。

ハカに就いて

梅原末治先生

先生は先づ御自身と民俗學との淺からざる因縁に就いて興味深いお話をされた後、先生と斯學との關係は決して『諸學分派以前何も知らずに民俗學にも馳せ參ぜ』られた過去の思出に盡くるのではなく、現在の先生の學問に對してもこのものが強く關聯して居る事を具體的に墓の調査を話題とされつゝ、お述べになつた。

それは例へば、墓の考古學的研究に於ける從來の考古學者の態度が餘りに選擇的に過ぎた事、従つてかゝる選擇考古學に對してより一般的な學的態度の必要を痛感する事、そしてこの様な反省に刺戟を與へたものとして民俗學と民俗學者(柳田先生)があつた事、又民俗學の方法たる探訪の如きもそのまゝ考古學の方法として生かし得るのであり、先生御自身嘗て東京博物館關係の調査に之を活用された事等の御話に於て、特に私共が民俗學に志す者として有難く拜聽した所の御教示の要旨であつたと思ふ。

もとより先生の御専門の事に關しては未熟な私共の考へ及ばざる所であるが、學究としての生きたる御體驗には吾らとても感激を以て共鳴させて戴いたのであつた。

以上、不明にして、當日講演御主旨を誤り傳ふるであらうことを高谷氏、梅原先生にお詫申上ぐる次第である。(兄玉)

後醍醐天皇宸翰拜展

恩賜京都博物館に於ては今年後醍醐天皇崩御後六百年に相當るを記念せんが爲、去六月一日より十五日迄天皇の宸影、並に宸翰

を拜展し、之に併せて皇子後村上天皇の宸翰、護良、宗良、懷良三親王の御筆蹟をも展覧した。まづ宸影としては大徳寺、清淨光院、廬山寺及び吉野神宮の各所に藏せられるもの合せて四幅を全部一所に掲げて、夫々その畫風の相違にもかゝらず莫然たる御風手の相通じて存するを拜せしめた。宸翰としては御眞蹟として徵證の確實なるものゝ中、東山御文庫、岩崎小彌太男、前田公爵家並醍醐寺等極少數の所藏に係る已むを得ざるものを除いて、爾餘のすべてを網羅して、ほゞ之を年次の順に列陳し、天質莊重なる御筆勢の年を経ると共に、愈御高邁の趣を加へさせらるゝに至るを知らしめた。

後村上天皇に就ては丹生都比賣神社藏の御審進狀と水無瀬宮藏の御願文、護良親王は高野山文書中の御祈願狀、宗良親王は大徳寺の御消息、懷良親王は東妙寺の梵網經御與書、それ〴〵一二點づつに過ぎなかつたが、御父帝の御書風と併せ拜して一際感激の深いものがあつた。

國威元寇展

大阪市の經營する大阪城天守閣歴史館は、昭和十三年五月十日より六月十日に至る會期を以て、頭記名展覧を開催し、各種貴重史料を展陳し、時局誠に有意義の寄與をなしたが、以下出陳内容を一瞥して展覧の概況を窺ふ事とする。

(詳細は大阪市發行、國威元寇展観目録参照の事。)

本展覧は元寇史料の蒐集展覧に於て稀有の盛観を示した、之が

準備に當れる當事者の意圖も亦爰に在つたといふが、其の事は事實に於てよく具現され元寇史料展の名こそ相應しきものであつた。總出品者七十餘家、出品總點百四十數點、諸家秘藏の貴重史料が一堂に配せらるゝ中に、宮内省御貸下異國祈禱文書三卷は八代博士論文中に内一卷の紹介ありしのみで、學界猶多く其内容を知らざるもの、文永七年三月十五日、弘安四年七月廿五日並年紀不明計三卷、之等は全て元寇兩度の役に朝廷御軫念の程を長察する絶好史料であり、京都市田中忠三郎氏出品の不動護摩紙背文書後醍醐院々宣、並びに高野山金剛峯寺出品の太政官符等と共に朝廷の御惱深かりし事を後人をして追慕せしむる重要史料である。之と共に熊本縣米智德氏出品の金光明最勝王經十卷は學界の猶多く不知とする貴重史料たる點に於て特に擧ぐべきものであらう。十卷の内第一卷は畏くも伏見天皇の御宸筆であり、第十卷々尾法印良清の正應三年季秋十日付奥書には、最勝王經書寫の旨趣が書き綴られ華洛安穩皇業長久の御軫念を以て畏くも御宸筆を染めさせられし所以を明かにしてゐる。

弘安役後に於ても、猶且つ朝廷の御惱深く、祈誓を佛神に込めて異國退散を御祈願ありし事の畏くも拜せられて見るもの、襟を正すものであつた。舊狩野家傳來、現在帝室博物館藏御物竹崎季長繪詞模本の出陳も、戦後年を経る事猶淺き永仁初年の筆として眞景を寫すに近く一般の目を惹くことも多く好箇の出品と觀せられた。熊本縣滿願寺は同寺々寶中の寺寶たる時宗時定畫像を始め年

代記、文書等を出陳して展觀に光彩を添へ、鎌倉建長寺出陳の國寶大覺禪師諷誦文は元寇當時に於ける時宗の心情を吐露して餘す所なく、之に配して東京、九州方面より出品の元寇時に於ける武士の動靜を示す諸文書類は本展觀の蓋し重要な部分として當時武家社會の元寇對應の眞姿が讀まれて史的事實の確然顯現するを感ぜしめたのである。此部分に於ける重なる出品物は島津公爵家、薩藩舊記中比志島文書三卷、二階堂文書一卷、鍋島侯爵家深堀文書二卷、山代文書二卷、毛利公爵家兒玉文書一卷、立花伯爵家大友文書一卷、史料編纂所白井文書二幅、九州帝大法文學部來島文書一卷、村田隆長氏龍造寺文書一卷、入來院重尙氏入來院文書一卷、武光文書一卷、廣瀬正雄氏中村文書一卷、中村物次郎氏中村文書一卷、長崎縣立圖書館青方文書等であり、元寇史料として著聞する野上文書、五條文書、都甲文書等を逸してはゐるが、右文書の要所々々が展示せられて元寇と鎌倉武家社會との諸關係とが讀みとられ、誠に興味深きものであつた。目錄は展示せられた部分に付ての讀み、並に略解を加へたのであり、上記諸文書は猶多くの關係史料を其中に收めてゐる。之等諸文書の中に於て、大友文書の内弘安三年十二月八日付鎌倉幕府御教書が、

鎮西警固事蒙古異賊等明年四月中可襲來云々早向役所嚴密可被用心近年守護御家人或依所務之相論或就檢斷之沙汰以不和之間無同心儀之由有其開挿自身之宿意不顧天下大難之條甚不忠之御家人已下軍兵等者隨守護命可致防戰之忠守護人亦不論親疎注進忠否可申行賞罰之相互於背仰者永可被處不忠之重科以此旨可相

觸國中之狀依仰執達如件

相模守在判

と書き、天下大難に際して私情に走るの不忠を斷じ、奉公の誠意を望める等現代人の心情に教を垂れるものである。其他二階堂文書によつて筑前警固番役結着次第を知り、來島文書によつて壹岐・平戸・鷹島烽火連絡による敵襲報知の策ありし事實、比志島文書によつて文永八年早くも異國警衛の令薩摩阿多北方地頭宛渡せられた事等見るに従ふて史興の加はるものがあつた。特に異國警固番役に關する史料は諸文書に數多く散見せられて元寇禍の日本に與へた長期且深刻なる影響が明白に立證せられたことも祖業を思ふ吾々の留意すべきこと、考へられた。社寺祈禱のことは朝廷の御事は申す迄もなく、幕府又諸社寺に令して異敵退散に懇祈を致さしめたのであつたが、本展觀に出陳せられた諸社寺の史料は、今更にそのことの如何に盛大なりしかを思はしめるに充分のものであつた。當時祈禱に使用せられた畫像其他の佛具も展觀せられて觀者の満足を充したのであるが、高野山金剛峯寺、國寶々簡集中鎌倉幕府御教書、福岡縣大悲玉院、雷山文書、其他上記の事實を

明示する史料が展示され、自ら血を刺して金剛經其他大部の經卷を書寫したと傳へられる時宗の懇誠の程も併せ思はれて、元寇勝利の一因も感ぜしめられたのである。この祈禱の事に於て興正菩薩安覺禪師關係史料は數多く出品され、特にその烈々たる氣概と憂國至誠の情に於て深く敬仰せらるべき安覺禪師の祈願文數點が悉く一所に會した事は、當時國民の憂國的氣概爰に顯著たるを思

ふて、展觀中の一重要部と觀ぜられた。

此他現在に於ても九州其他に行はるゝ蒙古祭具、國寶鶴岡社務記録を始とする記録類、元使良弼書狀其他歴狀寫數種、傳蒙古兜數頭、元寇繪畫數點等多種多様の内容を以て展觀は構成せられ、目より心への歴史教育が應分の役割を果しえた事は近來の快事とさるべきであらう。(有働研造)

東洋史談話會

春季懇親會を五月七日午後七時より樂友會館食堂に於いて開催。那波先生學位論文通過祝賀、新任安部講師及び東洋史新專攻生歡迎等々の意味に於いて懇親のまことをあげ、談話會追懷談に花を咲かせた。

支那學會

昭和十三年度第一回例會 五月二十一日午後二時より樂友會館にて開催。講演は

文房 清 供

青木 正 兄 氏

東方文化研究所支那語學講習會

支那文化理解の工具として支那語學は不可缺に必要だとの趣旨の下に、吉川幸次郎、倉石武四郎、傳芸子の三氏を講師として五月九日開講。公開講習會として一般に呼びかけてゐる。

東方文化研究所第一回公開學術講演會

六月四日(土)午後開催。松本所長の挨拶に次いで左記二講演あ

り盛況であつた。

上海 史 談

新村 出氏

上海の地方と日本との關係を日本文化の側から觀察しようとするのが本講の趣旨である。上海の地方は唐代には松江と呼ばれ、華亭縣がおかれ、青龍鎮が要港として著れてゐた。我が遣唐使船も附近を通つたが日本人との直接交渉が始まつたのは十二世紀頃からである。宋の神宗の頃より此の地方は大に發展し、青龍には市船司が設けられた。而して京都の泉涌寺の開祖俊成は其の頃に松江に於て學を修めたのである。南宋末、元初に青龍が衰微すると共に上海が之に代つた。上海なる名が初めて文獻に見えるのは明極楚後の「和上海瀕晉寺明遠樓韻」なる詩である。此の人は日本に渡來して後醍醐天皇、北條高時の尊信をうけ、又楠木正成も彼に就て參禪したとの傳説がある。上海に城壁が築かれたのは十四世紀に倭寇の禍を防ぐ爲であつた。其後元祿時代に上海と長崎との貿易關係が成立し、和漢三才圖會の地圖にも上海が刻されてある。文久三年に幕府の視察團が派遣され、その報告書は「黃浦志」と名付けて刊行されてゐる。明治以後では「上海繁昌記」竹添井々の詩、岡千仞の「觀光紀游」等がある。當時、歐米人に接した初めは彼等の物質文化をとり入れるのに本地まで行かず、上海に於て諸般の學術技藝を學んだのであつて、例へば築地活版所が職工を派遣し、材料を買入れ、又造船術等を學び、或は岸田吟香が「ボン」和英字典を上海で印刷するなど、上海が先進地として明治文化の發展に寄與した功は否めない。此の岸田吟香は上海

に樂全堂なる藥舖兼書店を營んでゐた奇人であるが、その日記は江戸辯の口語で書かれたもので、慶應三年に既にかゝる言文一致體を用ひてゐた事は甚だ興味深い。因みに此の講演は「東方學報」次號に掲載される豫定である。(藤枝記)

古代朝鮮の墓制

梅原 末治氏

近く本誌上に發表の豫定に就き梗概省略。

西洋史讀書會

例會 昭和十三年度第一回例會を五月十一日、二回生歡迎會を兼ねて開催。會食後、訛、野末兩君の卒業論文發表あり、出席者時野谷、原兩教授、岡島、鈴木兩講師を始め廿三名。

例會 昭和十三年度第二回例會を六月十一日開催。左の二君の讀書紹介あり。出席者、時野谷、原兩教授始め二十四名、梗概左の如し。

J. Huizinga, Renaissance und Realismus (Wege der Kulturgeschichte)

二回生 會田 雄次

中世に於て一般的底流として存した素朴的リアリズム、即ち自然主義は、中世末期に於て隆盛になつたが、結局それはルネッサンスの理想主義やハイパーリアリズムにより克復され、その完全な發達はルネッサンス以後に求められる可き事を主として美術、文學に於て説き、ブルツクハルトやそのエビゴーンのリアリズムを一標式とするが如きルネッサンス觀の公式を駁し同時に中世に

於けるリアリズムの發現を以てルネッサンスの到來と見る從來の見解に力強い抗議を提出したものである。

要するにフイチンガはルネッサンスの意義を盛期ルネッサンスの理想主義に認め、リアリズムの精緻なる分析を行ひカトロチェントーの如きはその有するリアリズムの性質に於て中世に屬さしむる可きを明かにせんとしたのである。

ペアー・チャーティズム

三露善二郎

チャーティスト運動とは、一八二五年より、一八五五年の三十年に亙る英國労働者の政治的運動である。其の間に複雑なる経緯があり、曲折があるが、大體次の如き發展段階をとつた。即ち二五年より三〇年に至る孵化の時代を第一段階とし、中産、労働階級相提携し以て選舉獲得に努力した時代である。第二段階は三一年より三四年に至る間で前代の反動として理論闘争の時代である。

第三段階は三七年より四二年に至る間で、實際運動、組織完成の時代である。この間に、チャーティストの具體的主張たる、所謂チャーターの六點は決定され、三九、四二年の兩度に議會に對し大請願がなされ、騒擾が各地に起つた。この四二年の大騒擾を以て運動は最高頂に達し、以後は次第に衰運に向ひ、四八年には再び請願は行はれたが成效せず、結局五十五年には完全に消滅するに至つた。この運動は失敗に終つた。しかし英國社會進歩の上になした功績は莫大なるもので、政府資本家に反省を促し、労働者階級の自覺を高め、其の後間もなくチャーターの六點の實現された點より見て、決してこの運動は無意味のものでなかつたと言は

ねばならぬ。

地理學教室春季(九州)旅行記

去る五月七日から約一週間の旅程、室賀先生、野間助手、伊藤副手の御指導を受けました。同日正午富士丸で神戸出帆、門司に向ひ、船中の實習を樂しみつゝ翌早朝九州の土を踏みました。

日田への途中博多驛に下車、大先輩の楠田鎮雄先生をお訪ねし、附近の水城址見學の後一路日田へ向ひました。

陥落盆地の底にある日田の町は流れに沿ひ、製材機の唸りに學校の鐘が讀點を打ち、古墳のある山の彼方から峠を越えるバスの響きがこだますると言つた町で、小京都と言はれるのも一應領けます。この地で一泊。

翌九日の午後森町を経て深耶馬溪に入り、バスの窓から新緑を賞しつゝ、山國川に沿ふて降り、中津に宿を求めたのです。

(三上正利記)

十日中津より第二の目的地國東半島に入る。眞玉川を登り、燒畑を見たり路を失つたりして伊美山を越えて赤根に、更に桑小麥の谷を北上伊美よりガソリンエンジンで起す電氣の光が町を明るくする姫島に渡る。

十一日姫島見學、漁村、陸には鹽田小麦甘藷その中にまじつて除虫菊が映えて居る。小牛を買つて來て飼養して賣る。豚は最近ぶう／＼鳴き出した。黒曜石は既に採集する者なく粘土が僅か移出されるのみ。比較的生活がのんびりして居て移民獎勵のポストターがさびしさう。午後二時島を去り伊美に、再び海岸沿ひに五寸

程のびた七島蘭を見つゝ長驅別府へ。太陽が姿をかくした頃やつと別府の町から一里程山に入つた觀海寺温泉で塵を洗ふ。

翌日の夜大阪に急ぐこがね丸の中で日田や姫島の思出を夢に再現。(川上喜代四記)

地理學談話會

昭和十三年度第一回 五月廿一日(土) 於實習室

一、春季旅行談(九州)

二回生 川上喜代四

二、乾燥景瀾

二回生 三上 正利

三、農業地域について

三回生 淺井 辰郎
朝永陽二郎

第二回 六月十一日(土) 於實習室

一、濃尾三地方に於ける古築址の分布

三回生 柴田 孝夫

二、人口圖の諸問題

伊藤 博

三、都市計畫より見たる城下町の地割

吉田 敬市

小牧教授渡歐

五月廿七日小牧教授は和蘭アムステルダム市にて開催される國際地理學會議に本邦代表として出席の爲郵船靖國丸にて神戸出帆。同會議は前後に於ける各方面への見學旅行を除けば七月十八日より廿八日にわたり同市植民館にて議事を取行ふ。

考古學談話會

昭和十三年度第一回考古學談話會は人類學會と合同して五月十

四日午後一時より樂友會館にて開催。左の諸氏の講演があつた。出席者は梅原助教、三宅博士を始め廿五名。

一、百濟の都扶餘の發掘

岡崎 卯一氏

一、所謂中石器文化の概念

藤岡謙二郎氏

一、アロイス・リッゲルに就いて

長廣 敏雄氏

一、奄美群島に於ける葬制の變遷

三宅 宗悅氏

(幻燈使用)

岡崎氏は春休に梅原助教に隨從して十日間百濟の舊都扶餘の古墳發掘に参加した當時の實際をかたり、其の後の旅行所見をも述べ、寫眞、繪葉書等を供覽した。藤岡氏は中石器時代乃至文化なる概念はかのラボツクの區分の様にと然たるものではなくて廿世紀に入り一部の人々の唱へ出した名稱なることを前置きとして、それ以前に考へられた渠溝説を思想的に見、改めてマドレーン期とローベンハウゼン期文化の過渡の文化を個々に抽出した上、これらの文化が全體として後氷期が生んだ高次の原始收得經濟的であらざるを靜的な姿を有することを説いた。長廣氏は最近繙譯を完成されたリッゲルの「裝飾史の基礎問題」(別稱「樣式論」(Alois Reple: Stillagen 1893 Wien)を中心に、彼が十九世紀中葉頃の美術史界で流行した Semper 等の技術論的理論の傾向に對し、いはゞ造形美術の含める藝術意志 (Kunstwollen) なるものを高唱した事を述べ、更に彼が考古學的な物に注意を拂つた事は「後期ローマ時代の工藝」(一九〇一年初版)に見られることを擧げてリッゲルのとつた立場の美術考古學的存在事を明に

した。

三宅氏は南島諸島の葬制を幻燈を使用し乍らその變遷を説明した。これは氏の實地調査に本づくもので一々の實況が示されたことに依つて興味の深いものがあつた。(澄田正一)

會報

○會員動靜

◇入 會

愛知縣寶飯郡國府町流霞、牧山方

長野縣飯田市大字飯田上三七六八

(右二氏 稻葉慶信氏紹介)

大阪府三島郡山田村字小川

(右 徳重淺吉氏紹介)

松本市田町三二六

(右 小牧實繁氏紹介)

奈良縣生駒郡生駒山腹

(右 梅原末治氏紹介)

京都市左京區吉田本町一五、靜修館

京都市左京區吉田中大路町三四、毛利方

京都市東山區五條橋東六丁目鳥邊山五八五、吉田方

三輪芳明氏

岡田良吉氏

江崎 雪氏

三喜田 熊藏氏

釣田正哉氏

須甲理喜氏

瀬良益夫氏

讚井廣潤氏

毛利 久氏

京都市上京區猪熊通中立賣上ル

京都市左京區吉田二本松町九、大住方

京都市左京區淨土寺南田町七四、桐山方

京都市左京區田中門前町二ノ一、興學舎

京都市左京區下鴨宮河町三六

京都市左京區田中大堰町三ノ一

◇轉 居

京都市伏見區新町四丁目四六五

京都市澁谷區榮通二丁目六番地

京都市左京區北白川別當町四九、加藤方

横濱市鶴見區東寺尾町一六〇七

京都市澁谷區代々木富ヶ谷町一五二六

京都市右京區川島北裏町五八

京都市杉並區天沼三丁目八二三

京都市世田ヶ谷區代田二丁目千五番地

◇退 會

須甲理喜氏

○寄贈交換圖書雜誌目錄(六月現在)

朝鮮史料叢刊、第八、眉叢日記草、一、二、三、四

朝鮮史料集眞 下

朝鮮史料集眞 續

朝鮮史料集眞 第四編 第五、八、九、十卷

岡本信太郎氏
菅田慶介氏
木村正大氏
小田泰正氏
小田丙午郎氏
加畑一夫氏

藤岡謙二郎氏
黒板勝美氏
野末良平氏
鳥羽耕治氏
坂本太郎氏
西井克己氏
岩橋小彌太氏
時野谷勝氏

朝鮮史 第五編 第八、九、十卷

朝鮮史 第六編 第三、四卷

高麗史節要補刊及附錄

以上 朝鮮總督府朝鮮史編修會

島田武彦著 清涼殿の御裝飾

坂本太郎著 大化改新の研究

梅田育太郎著 概説日本文化史

繪具染料商工史 大阪繪具染料同業組合

祭政一致と臣民道 大倉精神文化研究所

楠公研究の葉 軍事史學會

回教の全貌 イスラム文化協會

藤井照純編 著 東洋文庫

小田切文庫目錄 東京人類學會

人類學雜誌總索引 (卷一—五〇) 京城帝國大學文學會

史學論叢 七 東大史學會

史學雜誌 四九ノ三、四・五・六 日本歷史地理學會

歷史地理 七一ノ四・五・六 社會經濟史學會

社會經濟史學 七ノ一二、八ノ一・二・三 廣島史學研究會

史學研究 九ノ三 東京人類學會

人類學雜誌 五三ノ三、四・五 東京人類學會

考古學雜誌 二八ノ四・五・六 考古學會

文 五ノ四・五・六 東北大文科會

國學院雜誌 四四ノ四・五・六 國學院大學

史迹と美術 九ノ四・五・六 史迹美術同致會

經濟論叢 四六ノ四・五・六 京大經濟學會

社會學徒 一二ノ四・五・六 社會學徒社

國史學 三四 國史學會

史學 一六ノ四 三田史學會

史淵 一八 九大史學會

青丘學叢 二九 青丘學會

國民精神文化 三ノ四、四ノ一 國民精神文化研究所

民族學研究 一五 早大文學部

皇學 四ノ二 日本民族學會

イスラム學 六ノ一 神宮皇學館々友會

東洋史研究 三ノ四 イスラム文會協會

中國文學月報 三七・三八・三九 東洋史研究會

善隣協會調查月報 七一・七二・七三 中國文學研究會

歷史學研究 八ノ四・五 善隣協會

商業と經濟 一八ノ二 歷史學研究會

軍事史研究 三ノ二・三 長崎高商研究會

哲學研究 二ノ四・五・六 軍事史學會

紀州文化研究 二ノ四・五 京都哲學會

長崎談叢 二二 紀州文化研究所

明治大學史學會々報 五 長崎史談會

臺大文學 三ノ二 明大生徒史學會

Harvard Journal of Asiatic Studies 三ノ一 臺北帝大文學會
Harvard-Yenching Institute.
Young Pao (通報) 三三ノ五
第二十三卷 第三號 六三五